

原子力の

平和的利用調査のため

佐藤 敏床部長を欧米に派遣



佐藤 敏床部長

去る五月

閣議決定によつて原子力利用準備調査会が内閣に設けられ、続いてそれに先立ち、いわゆる原子力予算の決定にもとづいて通産省に原子力予算打合会が設置され、わが国の原子力利用に関する方針と当面の原子力予算の使用方法及び、政府当局のみでなく学識経験者をも加えて審議検討されることになつたことは周知の通りである。

地質調査所はいわゆる原子力予算とは一応別にウラン資源探査費として1,500万円の予算を割り当てられ、主として調査技術の研究・基礎的調査・放射能鉱物の調査研究設備の整備を当初の任務として、29年度第二・四半期後期からその実施に當つてきたが、上記の原子力予算打合会にも、また原子力利用準備調査会にも、当局からの要請によつて協力してきた。

今回政府は、上記調査会・打合会の審議にもとづき、事実上政府の使節の資格をもつ原子力調査団の海外派遣を決定し、原子力とそれに関する諸技術・原子力管理・各種の防護方法・原子炉材料と関連技術・原子力資源の処理および探査等について、先進諸国におけるそれらの実態を調査せしめることとなつたが、資源の探査に関する部面を担当する一員として当所から佐藤源郎敏床部長がこれに参加、昨年12月25日に出発した。

調査団の一行は一応A・A¹・B・Cの4班に分けられ、佐藤敏床部長の属する班は小川芳樹東大教授と佐藤部長とをもつて構成するC班であつて、ウラン・トリウム等の選鉱製錬および資源の探査を主として調査することになつてはいるが、問題の密接な関連性にかんがみて、各班

ともなるべく主要コースを同じくするように計画されている。

C班のコースと日程の大略を記せば、まず12月27日ローマ着の後、イタリアの原子核研究委員会・地質調査所などを訪ね、明けて昭和30年1月2日にはジュネーブに赴き、同地のヨーロッパ原子核研究委員会やパーセルの地質調査所などを訪問、スイスに4日間滞在の後、1月6日にはパリに飛び、同地の原子力委員会・地質調査所などを視察の上、シャティヨンの研究所を見、さらにリモージュの敏床を見学、1月15日にベルギーに入り、ブラッセルの地質調査所などを訪ねる。

4日間ベルギーに滞りした後、1月19日に西独に行き、ルドウィヒスハーフェンのI.G.の研究所・地質調査所・またできればヴェルゼンドルフ地方などの視察をすまして1月30日にリスボンを訪れ、許されればウルグリカのウラン鉱床も見て、2月4日にロンドンに入り、英国の原子力委員会や地質調査所、ハーウェルの研究所も訪ねコンウォールの敏床地帯も視察して2月10日にロンドンを発ち、同月11日カナダのオタワに着く。

カナダでは原子力管理委員会・地質調査所を訪ね、モントリールリヴァー地方も視察、2月16日に米国ワシントンに飛び、米国原子力委員会・鉱山局・地質調査所などを訪問、合衆国当局の斡旋と指示によつて約1カ月間アメリカ各地の原子力関係研究所や主要ウラン鉱床地帯の視察を行い、3月23日に東京帰着の予定である。

調査班の使命は、いうまでもなく、単にウラン鉱等の選鉱・製錬・資源探査そのものの技術を先進諸国に学ぶというだけでなく、それに附随する諸問題をいかに処理しなければならぬかと言うことについても、能うかぎりの調査を行い、わが国独自の行き方を具体的にきめていく上に必要なあらゆる関連事項を検討してくることにあるのであつて、その成果には大きな期待が寄せられている。